

企画展・講演会「縄文貝塚研究と酒詰仲男～没後50年～」について

若林邦彦・浜中邦弘

2015年9月26日(土)～11月8日(日)の日程で、本学今出川校地のハリス理化学館同志社ギャラリー企画展示室にて企画展「縄文貝塚研究と酒詰仲男～没後50年～」を行った。酒詰仲男氏は、同志社大学文学部教授であり、本学博物館講座開設者でもある。酒詰氏は縄文時代の貝塚研究者として著名で、1950年から1960年代に縄文貝塚調査データを総合的にまとめた極めて重要な業績を残している。『日本貝塚地名表』(1959)と『日本縄文石器時代食糧総説』(1961)であり、断片的であった貝塚研究を総合的にまとめた初の成果として、以後の研究の基礎となっている。

また酒詰氏は、本学在職時に縄文貝塚以外にも様々な遺跡の調査研究に携わり、多くの後進を育てた。さらに西日本の私立大学でもいち早く博物館学芸員課程を設置した。酒詰氏のこれら業績とその人間性に今回焦点をあてて企画展ならびに講演会を開催した。会期中には約8400名と多くの来場者を得た。

【企画展の内容】

展示品の多くは歴史資料館収蔵品と御子息の酒詰治男氏が収蔵する資料で構成される。一部に東京大学総合研究博物館、教え子及び関係者などの資料がならぶ。酒詰氏の縄文貝塚研究は関東の遺跡調査をベースに始まり、1953年に同志社大学の教員となった酒詰氏は広く西日本及び北海道へと遺跡調査に乗り出していく。今回の展示では酒詰氏が関係した数多くの遺跡の中から代表的な遺跡を抽出し、その遺跡の資料を展示した。その調査で示された学問的意義に触れた。

酒詰氏は人間味あふれる人物であり、その一端が和歌や絵画などにみられる。研究に邁進し、多くの後進を育成するとともに、文化人としての酒詰仲男氏の顔も彼を表す上で欠かすことはできない。そうした資料も今回展示した。

本学の博物館開設に関する初期の資料もあわせて展示した。本学における博物館学芸員育成の道筋を積極的に推進したその足跡を追った。

また酒詰氏の教え子・関係者からも資料の提供を受けた。提供資料の多くは写真で、極力展示することとした。酒詰氏を始めとして当時の学生たちの生き生きとした姿を垣間見ることができ、その雰囲気は伝わるよう展示を行った。

【講演会の開催】

10月11日(日)には明德館1番教室にて『縄文貝塚研究と酒詰仲男』をテーマに3名の先生にお願いし講演会を開催した。酒詰仲男氏から本学で指導を受けた白石太一郎氏(大阪府立近つ飛鳥博物館館長・国立歴史民俗博物館名誉教授)から「酒詰仲男先生と初期同志社考古学の群像」、現在の縄文生態に関する研究をリードする羽生淳子氏(カリフォルニア大学バークレ校教授・総合地球環境学研究所客員教授)から「縄文生態研究と酒詰仲男」、酒詰仲男氏の御子息である酒詰治男氏(甲南女子大

学名誉教授) から「同志社文学」から「貝塚」への講演をいただいた。また来聴者の中から酒詰氏の指導を受けた石部正志氏、前田洋子氏からもコメントをいただき、テーマとした内容を十二分に盛りこむことができ、盛況のうちに終えることができた。

今回の白石氏・羽生氏・酒詰氏3名の講演内容は、本書に掲載した。当日講演の口述内容に3人が加筆修正したものである。なお編集作業は菊池望・藪田みゆき・手島美香・浜中邦弘で行った。

ハリス理化学館同志社ギャラリー第7回企画展

2015
9/26[土]→11/8[日] 入場無料

会場: ハリス理化学館同志社ギャラリー2階企画展示室
開館時間: 10:00 - 17:00
閉館日: 月曜日・祝日

和歌山県笠島遺跡調査時の酒詰仲男氏



同志社大学在職時の酒詰仲男氏



同志社大学今出川校地

140
Anniversary
1875-2015

公開講演会
「縄文貝塚研究と酒詰仲男」

2015年10月11日(日) 13:30~16:30
同志社大学今出川校地地蔵館1階教室

講師:
白石太一郎氏(大阪府立文部考古学館館長)
「酒詰仲男先生と初期同志社考古学の群像」
羽生淳子氏(総合地球環境学研究所教授)
「縄文生態研究と酒詰仲男」
酒詰治男氏(甲南女子大学名誉教授)
「同志社文学」から「貝塚」へ」

主催: 同志社大学歴史資料館
お問い合わせ: 同志社大学歴史資料館 0774-65-7255
同志社ギャラリー 事務局 075-251-2716

酒詰氏による
動物骨観察メモ

縄文貝塚研究と
酒詰仲男
没後50年



縄文土偶

第7回企画展
「仲男～没後50年～」

同志社大学今出川校地

140
Anniversary
1875-2015

「日本縄文石器時代食料総説」(1961)は、断片的であった貝塚研究を総合的にまとめた初の成果として、以後の研究の礎となっている。現在、貝塚における先史時代の食糧研究により、縄文文化は、地球環境と人類文化の生態的共存関係の一類型として注目されている。そのユニークさで世界的に知られるJomon Cultureへの基礎的貢献として、本学における酒詰氏の研究は重要であった。

さらに酒詰氏は、本学在職時に縄文貝塚以外にも様々な遺跡の調査研究に携わり、多くの後進を育てた。また、西日本の私立大学でいち早く博物館学芸員課程を設置したことも知られる。展示を通して、そのような同志社大学における酒詰氏の足跡を幅広い視野からたどりたい。



縄文貝塚をめぐる酒詰氏の主な著作



同志社大学今出川校地
ハリス理化学館同志社ギャラリー2階企画展示室
(京都市営地下鉄今出川駅下車東へ徒歩3分)



ハリス理化学館同志社ギャラリー第7回企画展「縄文貝塚研究と酒詰仲男」

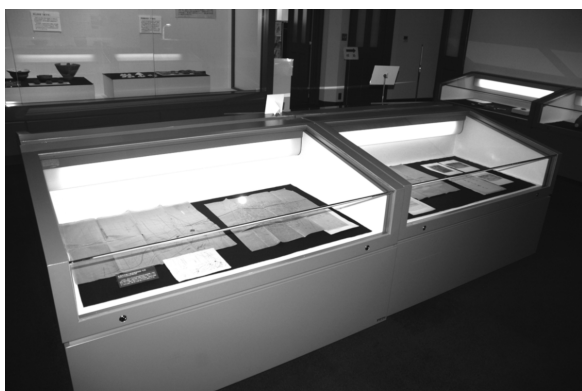
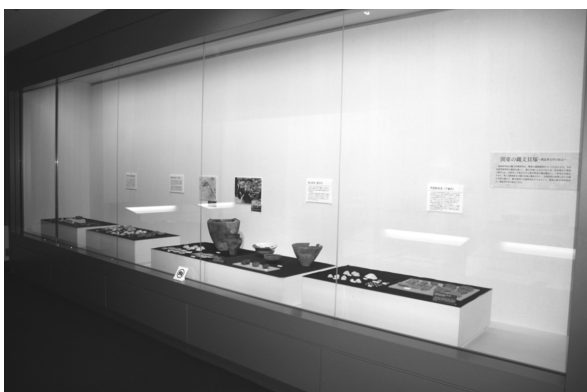
第1展示室展示品一覧

テーマ名	テーマ説明文	展示品キャプション	所蔵	解説
関東の縄文貝塚	酒詰仲男氏の縄文貝塚研究は、関東の遺跡調査をベースに開始する。大山史前学研究所の調査を通じて、縄文貝塚研究に関わる。1938年より、長谷部言人教授に勧められ、東京大学人類学教室に嘱託職員として所属し研究を本格化させる。多くの関東地方の縄文貝塚の調査にかかわり、貝塚形成の時期と出土品種の分析を通じて、縄文集団の生態研究をすすめていく。関東の貝塚研究は、酒詰考古学の原点である。	荒屋敷貝塚出土 縄文土器・貝類	同志社大学 歴史資料館	東京大学人類学教室時代の調査での出土品。同志社大学には、縄文中～後期の土器とともに出土した貝類が、種別に分類されて収納されている。酒詰氏の分類によるものだろう。
		余山貝塚出土 縄文土器・土偶・貝製品・骨製品	東京大学 総合研究博物館	東京大学人類学教室時代の調査での出土品。同志社大学には、一部の貝類・貝製品が所蔵されている。自然遺物だけでなく、多彩な人工物の出土が目をひく。
		菅田高田貝塚出土 縄文土器・石器・貝類・動物骨	同志社大学 歴史資料館	酒詰氏が同志社大学に赴任した翌年に発掘した際の出土品。出土した貝類と動物骨が種別に分類され、酒詰氏による手書きのカードが添えられている。
		小手指貝塚出土 縄文土器・石器・貝類・動物骨	同志社大学 歴史資料館	同志社大学に所蔵されている当遺跡出土品は少ない。ただ、貝類だけでなく、土器が型式別に分類されて保管されていた。酒詰氏が、内陸部の海性貝塚の帰属時期に関心を払っていたことがわかる。
東北の縄文貝塚	東京大学人類学教室時代の調査は、東北地方にも及んだ。下北総合学術調査の一環として、1951年に鈴木尚氏・植原和郎氏らとともに青森県最花貝塚の発掘調査を行っている。また、多数の東北地方の縄文遺跡も踏査している。戦後、安定した社会状況を基盤に、関東で貝塚調査をすすめていた研究者たちが、そのフィールドをひろげていったことがわかる。	最花貝塚出土 縄文土器・石器・貝類・動物骨	同志社大学 歴史資料館	北海道にも分布する縄文時代前・中期の「円筒下層式土器」・「円筒上層式土器」とともに、多くの動物骨がみられる。他地域では珍しいツキノワグマ骨の出土は興味深い。イノシシ犬歯は切断・穿孔されるなどの加工がみられ装飾品素材として利用されていたことがわかる。
広がる調査・研究 ～西日本や北海道で～	1953年に同志社大学教員となった酒詰氏は、学生とともに、様々な遺跡調査に乗り出す。それは、自身が関東や東日本の貝塚調査で培った研究をさらに広範囲に展開することにもなり、『日本貝塚地名表』『日本縄文石器時代食料総説』の編纂へとつながっていく。また、調査活動を通じて、戦後考古学の担い手を育てていくこととなる。	黄島貝塚出土 縄文土器・石器・貝類	同志社大学 歴史資料館	1964年の同志社大学考古学研究会中心の調査で出土した遺物群。出土土器は早期にほぼ限定されている。近年の貝類の放射性炭素年代測定では、約9000年前という年代がでている。
		大川遺跡出土 縄文土器・石器	同志社大学 歴史資料館	縄文時代早期の押型土器である「大川式土器」の標識となった土器群。サヌカイ製石鏃や剥片も多く出土し、集落の様相を知る上で重要である。
		鳥浜貝塚出土 縄文土器・石器・貝類・動物骨	同志社大学 歴史資料館	同志社大学が所蔵する資料は、縄文前期土器と動物骨・魚骨が多く残されている。また、クルミなどの植物食糧残存も豊富である。排泄物遺存である糞石も、当時の調査で出土していた。
		浜詰遺跡出土 縄文土器・石器	同志社大学 歴史資料館	同志社大学には、多数の遺物が保管されているが、石器類のなかで特に目を引くのが石鏃の多さである。縄文時代中～後期の漁労活動の実態を知る上で貴重な資料である。
		照岸洞六遺跡出土 縄文土器・石器・骨角器	同志社大学 歴史資料館	縄文晩期精製土器に加え、装飾品とも考えられる骨製品がみられる。
		古武井遺跡出土 縄文土器	同志社大学 歴史資料館	縄文晩期精製土器のみが、同志社大学に所蔵されている。完形に近い土器もあるが、出土品ではなく収集品の可能性も高い。
様々な遺跡の調査	学生とともに関わる発掘調査は、縄文貝塚遺跡にとどまらなかった。後進を育てる研究と教育のために、北海道の擦文文化や近畿の古墳の調査に関わった。また、そこでは遺跡保存の問題に直面することにもなる。	神恵内観音洞穴遺跡出土 土器・骨角器	同志社大学 歴史資料館	擦文土器に伴う骨製のヤス・モリ先には大型のものがみられ、海生哺乳類などの狩猟のためのものかもしれない。
		西山2号墳出土 銅鏡・石剣	同志社大学 歴史資料館	銅鏡には、古式の三角縁神獣鏡と中国系の四獣鏡がみられる。南山城の前期古墳の中でも有力者の存在をうかがわせる副葬品である。
酒詰氏の フィールドワーク	酒詰氏は1930～1950年代に関東の縄文貝塚の調査を行っている。本格的な発掘調査の遺構や土層の図面だけでなく、貝塚の分布調査を記録して地形との関連を検討した地図や、スケッチや遺跡内容のメモが自宅にたくさん残されている。それらは、まさにフィールドワークの記録である。その詳細な記述から、酒詰氏の関心についてうかがい知ることができる。	貝塚遺跡の分布図	酒詰治男氏	関東地方の明治期の地形図に、段丘崖ラインを書き込み、台地面を黄色に、谷部を水色に塗り分けている。赤字で貝塚地点が記入され遺跡番号が記されている。1930～50年代に、縄文期の海進現象と貝塚立地変遷は、議論の対象となっていたが、酒詰氏が踏査を通じてその検証を行っていたことがわかる。
		真福寺貝塚の発掘調査図面	同志社大学 歴史資料館	1940年に東京大学が発掘調査した際の図面。調査位置図・土層断面図・遺構平面図が丁寧にトレースされている。酒詰氏は、この調査で検出された大型住居跡について、調査データから複数回の建て直しによる重複と報告している。
		調査・踏査の日記類	酒詰治男氏	酒詰氏は調査・踏査の記録を克明にノートに書き残している。発掘調査記録だけでなく、各遺跡からの出土品のスケッチや出土品類・動物骨のリストなど、その記載内容は多岐にわたる。後の遺跡データを集成した著作のもとになったと考えられる。
研究の集大成	30年以上におよぶ酒詰氏の縄文貝塚研究は、『日本貝塚地名表』（1959）・『日本縄文石器時代食料総説』（1961）として結実する。この2つの著作により、はじめて縄文時代遺跡を列島規模で網羅的に比較することが可能となった。同時に、それらの記述は「食糧」という明確な一つの比較視点によって貫かれている。このように、縄文文化を生態学的な視点でとらえる酒詰氏の意図は明確である。	『日本古代食糧資料』と題された原稿	酒詰治男氏	酒詰氏の自宅に残されていた原稿。訂正などはほとんどないことから、『日本縄文石器時代食料総説』最終稿とも考えられる。ただ、章名や内容などは、実際の刊行本とは異なっている。校正時に再編集されたのか、この原稿自身は草稿として残されていたものかもしれない。

第2展示室展示品一覧

テーマ名	テーマ説明文	展示品キヤプション	所蔵	解説
文化人・酒詰仲男	酒詰氏は文化人であった。その一端を語るものが展示する和歌・絵画である。絵画は人物・風景など多彩で、自画像を描くなど興味深い。	絵画・書類	酒詰治男氏	「土岐光風」は酒詰仲男氏の雅号である。実母が美濃土岐氏の流れを汲む家の出身であったことから「土岐」が用いられたとされる。
考古学講座開設	1953年2月に同志社大学に着任した。同志社大学の本格的な考古学のスタートである。酒詰氏は「先史学」という言葉にこだわった。以後、同志社大学から多くの考古学者が育っていくこととなる。	日記 昭和28年4月28日より12月3日まで で 日録 1964年12月26日→	酒詰治男氏	東京大学時代から日誌を綴っており、それは同志社大学に来てからも変わらない。冊数は多く、展示資料は同志社時代における最初と最後の日誌である。
		図書貸出簿	同志社大学歴史資料館	最初の冒頭に書かれた文章を中央展示意匠に大きく掲げた。原本が同志社大学考古学研究室に大切に保管されている。今でも大切な言葉として研究室に伝わる。貸出ノートは今も同じスタイルで続き、学生達は諸先輩が繋いできた糸を今も紡いでいる。
		門出の色紙	酒詰治男氏	東京を離れ、同志社大学へと転職するに際し、関係者が酒詰氏への今後の門出を祝ってサインした色紙。人望ある酒詰氏を熱く感じる。時に酒詰氏51歳。
		菱根遺跡の発掘調査資料類	同志社大学歴史資料館	島根県出雲市大社町(旧簸川郡大社町)菱根に所在する遺跡。同志社大学着任後初の発掘調査。後に同志社大学文化学科を牽引する人々の参加が数多くみられる。出雲地域をフィールドに調査活動が行われ、報告書がまとめ挙げられた。
		『出雲古文化調査団報告書』 同志社大学出雲古文化調査団 1959年	同志社大学歴史資料館	『同志社大学人文科学研究所紀要』第二号 同志社大学人文科学研究所編 1959年
		『若狭大飯～福井県大飯郡大飯町考古学調査報告～』 同志社大学文学部文化学科編 1966年	同志社大学歴史資料館	1958年～1961年の夏期間を主に発掘調査した。報告書刊行を前にして酒詰氏は亡くなったが、教え子達が報告書を見事にまとめあげた。
博物館講座開設	同志社大学着任後、博物館講座が開設され、学芸員の育成が始まった。また展示も企画され、「徳富蘆花」の展示が行われた。	『同志社大学博物館研究』No.1 『同志社大学博物館研究』No.2 『同志社大学博物館研究』号外II	同志社大学歴史資料館	博物館講座が開設され程なくしていくつかのペーパーが発刊された。博物館講座の初期の動向を知る上で貴重な資料と同時に多くの仕事を酒詰氏がこなしていたことがうかがえる。
		徳富蘆花展	同志社大学歴史資料館	1957年に没後30年を機に展示が行われた。これらの資料から非常に緻密な計画とともにその苦勞の有様が数多く読み取ることができる。
同志社時代略歴	酒詰氏の研究の大きな業績は、それまであまり注目されることのなかった動植物遺体に焦点をあてたことであろう。その代表が学位論文となった「日本縄文石器時代食料資料総説」であろう。	『同志社考古』第1号	同志社大学歴史資料館	先史学研究会とともに新たに考古学研究会が結成された。その第1号である。今も断続的ではあるが続いており、現在第13号まで発刊されている。
		「酒詰仲男博士訃」 昭和40年7月1日 同志社大学先史学会	同志社大学歴史資料館	『先史学研究』第5号に急遽差し込まれた。
同志社大学考古学研究室と酒詰仲男	多くの教え子達が研究室から巣立っていった。その教え子達が保管していた大切な資料を展示し、一教員と学生との繋がり的一端を振り返る場とする。	同志社大学考古学研究室 関係写真類	卒業生・ 関係者 提供	

展示風景



企画展・講演会「縄文貝塚研究と酒詰仲男～没後50年～」について

